

【書評】

安田敬監修、西田留美可他著

『ケベック発パフォーミングアーツの未来形』

三元社 2003年

Kei Yasuda(dir.), Rumika Nishida et al., *Arts Vivants au Québec*, Sangensha, 2003.

長谷川 秀樹

HASEGAWA Hideki

本書は研究書ではないが、現代表現芸術にとどまらず広くケベックの芸術文化を網羅する、日本はもとより、他の国でも前例のない著作である。ケベックに関わる研究書は、管見のところ文学と政治学に収斂され、こうした研究状況を鑑みてもそれ以外の分野からケベックを論じる本書の存在意義は大きく、分野は何であれケベック研究には不可欠な文献といえるだろう。

本書には100を超えるケベックを拠点とするアーティストとその業績が詳しい解説とともに紹介されている。ただ、実際にはそのほとんどすべてが最大都市モントリオールを拠点としているので、「ケベック」というよりは「モントリオール」の都市文化、都市芸術なのでは？という疑問を感じなくもない。しかし忘れてならないのは、巻末で執筆者が指摘しているように、これらのアーティストが活躍し、アートが花咲いたのは、ケベック州政府やケベックを基盤とする公的機関、民間団体やアソシエーションの並々ならぬ奮闘努力と一貫した文化政策があったためである。芸術は決して木の股から自然に生えてくるものではない。古典芸術でもモダンアートでもこの点は同じだ。したがって本書で取りあげているアーティストや作品群は、モントリオールという都市芸術に決してとどまるものではなく、ケベックアート、世界に向けたケベック発のアート、ということができよう。

もう1つ、本書に目を通せば湧いてくるであろう疑問に、パフォーミングアーツとは何か？という点である。ダンス、演劇、マルチディシプリナリーアート（多分野の表現芸術をモザイク状に混在させたもの）、サーカス（シルク・ドゥ・ソレイユに代表される「新しいサーカス」）。これらがパフォーミングアーツであることについては誰も異議をさしはさまないだろう。しかし、本書は、映画や音楽もそれに含んでいる。映画や音楽が果たしてパフォ

ーミングアーツなのであろうか？

だが、本書を読むと、ケベックにおいては映画や音楽もまたパフォーミングアーツであることが十分理解できる。映画を例にあげるならば、ケベック映画を「ハリウッドの呪縛から開放し（160 ページ）」たダイレクトシネマ（詳細は本書のほか、本誌所収の加納由起子論文も参照されたい）、80年代に「ケベック映画を世界の絵舞台に押し上げた（161 ページ）」ドゥニ・アーカンをはじめとするドキュメンタリー、そして現在のニューウェーブに至るまで、ケベック映画がハリウッドのみならずフランス映画からの自立のために、「どのように演じさせるか、演出させるか」という点を最重要視してきたからだ。音楽についても、90年代後半にカナダのみならずフランス語圏全般で大ヒットした歌劇『ノートルダム・ド・パリ』（評者はこのDVDを持っていて、主演女優兼歌手のエレーヌ・セガラやナターシャ・サン＝ピエールのファンでもある）を思い起こせば、歌謡がパフォーミングアーツではないと断言することはできない。

本書は多種多様なパフォーミングアーツのアーティストおよび作品を時にはインタビューも交えながら丁寧な解説を加えて説明している。事典あるいはガイドとも言える文献である。その作品やアーティストの写真も数多く掲載されている。ただ、膨大な情報が1冊の本に詰め込まれたという感がぬぐえず、内容や作品を真に理解するには読む時間が相当かかるであろう。特に当該芸術分野に携わっていない者からすると研究書以上に難解かもしれない。本書で取り上げられている作品を実際鑑賞するか、それにははるかにおよばないものの、本書の脇にパソコンを置いて、そこで取り上げられている人物や作品についてネットで検索することが必要であろう。先に本書は写真がふんだんに掲載されていると述べたが、残念ながらすべてモノクロである。もちろん、これはないものねだりでしかないのだが。

あと、もう1つ残念なのは、図書という形である以上、「更新」がされないことだ。本書によってケベックでは次から次へと新進気鋭のアーティストとその作品が生み出されていることが想像できる。この営みは現在もなお続いていることであろう。しかし、当然ながら本書では書かれた時点でのアーティスト、作品しか把握できない。現代芸術、とりわけ本書の仏語タイトルでもある Arts Vivants（直訳すれば「生きた美術」）を活字・出版で扱う際に常にこのような困難さが付きまとうのである。

（はせがわ ひでき 横浜国立大学准教授）